※「はらまち九条の会ホームページ」が１２月に開設。http://www.haramachi9jo.net
「はらまち九条の会」だけで簡単に開くことができます。投稿もお待ちしております。

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報　No. 134
２０１０（平成２２）年５月８日（土）発行

万年筆

●終戦間近の原町空襲のようす　＜昭和２０年５月８日、トルーマン米大統領が無条件降伏の対日声明、勧告＞
１９４１（昭和１６）年１２月　８日（月）（ハワイ時間は７日（日））真珠湾攻撃で米英と開戦。
１９４５（昭和20）年2月16日（金）原町に東北地方で初の空襲、飛行場に隣接する原町紡織工場で4人が死亡。
8月　9日（木）空襲で大甕・太田の民家の3人が死亡。飛行場、原紡、無線塔も攻撃される。
8月10日（金）空襲で原ノ町駅機関区の6人が死亡。帝金工場、相農、原女、原町国民学校も攻撃。
8月１５日（水）ポツダム宣言を受諾・天皇の玉音放送・終戦。

私の戦争体験 38 その1

終戦の頃の原町飛行場　前編

原町区馬場　志賀五三三（いさみ）

私は昭和五（一九三〇）年四月一日原町区馬場生まれで、今年八〇歳になる。

兄三人が出征　家は四人だけに

大東亜戦争の開戦から三年の昭和十九年、日本軍はじりじりと追い詰められ、太平洋の諸島の各地では玉砕を強いられていた。我が家ではすでに長男の多男かずお、三男の敏美としみの出征に次いで、昭和十九年四月十八日には次男の英勇ひでおも召集され中国に向かった。

あとに残された家族は、両親と四男で十四歳の私、そして妹の四人だけとなった。強力な働き手を失ったことは、生産増強を強いられていた父にとって大きな痛手となった。働けど働けど仕事に追われ続けた。

父は息子たちの安否を気遣い毎日の新聞記事に目をこらす

兄たちからの音信は少なく、十九年八月七日、長男から「満州からフィリピンのマニラ港に上陸した」との手紙が届き、三男敏美からは十月十日、大分駅からマル秘の発信で「カエルマデマテ」の電報が届いたが、それが最後の音信になった。

敏美はその一ヶ月後に戦死する。

家族は戦局を伝える新聞記事だけが頼りだった。農作業を終えて一息ついた父は、日々息子たちに繋がる記事はないものかとラジオや紙面に目をこらした。特に、フィリピン戦線の記事を見つけると、長男の部隊のことではなかろうかと想像を巡らせながら安否を気遣った。

▲特攻隊で２０歳で戦死の志賀敏美さん。原町区夜の森公園には胸像が建てられている。

昭和十九年十一月フィリピンで三男の敏美は特攻で戦死する

昭和十九年十一月六日、三男の敏美はフィリピンのルソン島沖のアメリカ軍艦に突撃して戦死する。しかしその戦死を家族が知ったのは七ケ月後の二十年六月九日のことだった。

六月九日も明け方早くから、父豹象ひょうぞうと私は田んぼの代掻きをしていた。そこに志賀家の二軒隣の遠藤七兵衛さんが「豹象おじさん、新聞に敏美君の名前が出ている！特攻隊で戦死だって！」と新聞を抱えて跳んできた。

その時父は、顔色ひとつ変えることなく、泰然と「そうか、やったか」とだけ言って、また仕事を続けた。しかし、心中は悲しみでいっぱいだった。

擬装格納庫づくりの勤労奉仕

その時期、私たち相馬農蚕学校の生徒も学徒動員法に基づく勤労奉仕が日課になり、一番多かった作業は、原町飛行場周辺に飛行機を護るの擬装格納庫づくりだった。

（裏面につづく）

▲志賀家略地図（南相馬市観光交流課発行『ズームアップ』より）

▲志賀家全景。　原町陸軍飛行場に近い大農家だったので飛行場の兵士の宿舎になり、終戦間際には飛行場の仮本部事務所にもなった。
＜写真左手＞の奥座敷には、特攻隊で戦死した兄の敏美さんの遺影と祭壇も祀られていた。

（表のページより）

二十年二月、原町が初空襲

米軍の日本本土に対する本格的な空襲は、昭和十九（一九四四）年十一月、マリアナ基地からのB29によって開始された。以後、日本の主要都市は米軍の無差別絨毯爆撃によって焦土と化していった。

飛行場と隣接の原紡が攻撃される 原紡では挺身隊員ら四人が死亡

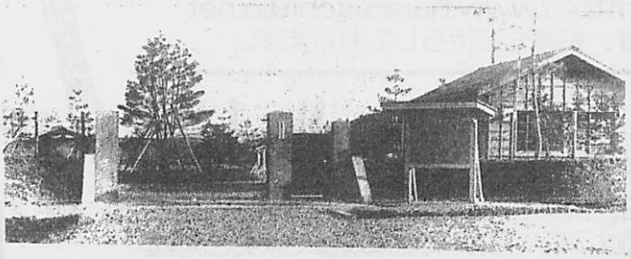
原町に艦載機が現れたのは昭和二十年二月十六日のことだった。本土に接近した米機動部隊から発進した約二千機の一部が原町に来襲した。硫黄島上陸に先だっての牽制が目的で、この三日後の二月十九日、連合軍は硫黄島に上陸を開始した。

二月十六日午前八時過ぎ、グラマン戦闘機とアベンジャー爆撃機からなる十六機の編隊が、原町飛行場と原町紡織工場（原紡）を繰り返し攻撃した。空襲警報もなく誰もが予想しなかった突然の空襲だった。

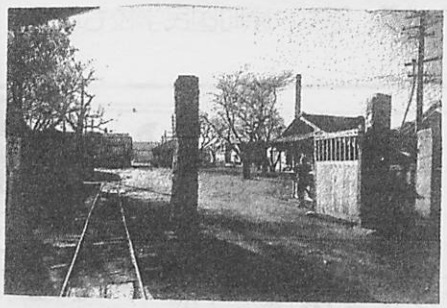
原紡では教員と女子挺身隊員、学徒動員生ら四名が死亡した。工場では始業の点呼が終わって仕事に就こうとした時だった。原紡が飛行場に隣接していたことが悲劇の原因だった。

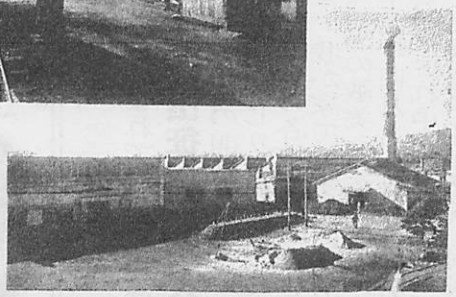
父は母屋の裏に防空壕を掘り始めた。徹夜を繰り返しながら、かなりの日数と材料を使って、家財や家族が避難できるだけの頑丈な防空壕に仕上げた。

飛行場の部隊でも、馬場地区一帯に軍用道路を拓き、山林の至る所に燃料用のドラム缶を隠蔽する壕を開削した。それらの壕に運び込まれたドラム缶は相当な数に上った。



▲原町飛行場の正門。現在も門柱だけが残る。志賀家はこの正門から北へ500mの旧馬場街道沿いにある。





▲「原紡」とよばれていた原町紡織工場（現在の国見団地）。昭和20年2月16日、原町飛行場に隣接していたため攻撃され、女子挺身隊員など4名が犠牲になった。

四月十二日 郡山方向に向かうB29の大編隊を呆然と眺めた

四月十二日の真っ昼間、初めて原町地区に空襲警報が発せられた。鹿島の烏浜方面からB29の大編隊が侵入し、国見山上空を南西の郡山市方向に悠々と飛んでいく様子を、私は友人とともに、相農の校舎裏の木陰から呆然と眺めていた。それは郡山を空襲するための大編隊だった。

また我が家の近くの飛行場でも、上空で訓練中の戦闘機の爆音、整備兵が試運転するエンジンの音などが轟々と、毎日農作業を続ける両親の耳に覆い被さってくる。農作業には相農生徒の奉仕を受けるなど、両親はやりきれない思いに堪えながら、銃後国民の務めとして日々耕作に励んだのであった。

軍人に憧れ飛行兵を受験

家の周辺にはいつも軍人がいて、いつしか、私は彼らに憧れるようになり、昭和二十年、平市で行われた陸軍少年飛行兵採用試験を十四歳で受けた。飛行兵を補充するため軍当局から学校側に圧力があったのか、旅費は公費だった。父も黙って承諾の印を押した。幸い、終戦となって私は入隊することはなかった。

仙台空襲で空は茜色に染まる

七月十日午前零時過ぎ、マリアナ基地を出発したB29爆撃機百二十三機が仙台を空襲し、無数の焼夷弾を投下した。茜色に染まった空は志賀家の裏山からも手に取るように見えた。この時仙台の医師の姉は無事だったが、仙台市街は四分の一を焼失した。

次は原町が空襲という噂で人も馬も山あいに避難

さらに七月十四日には岩手県の釜石に本州初の艦砲射撃があり、四二一名が犠牲になった。

間もなく、次の目標は飛行場のある原町だとの噂が流れ、住民の間に一気に緊張が走った。

気の早い者は山あいや谷間に避難した。近隣の人たちは、近くの地切ちぎり溜め池の隧道すいどうに避難した。家族同様の馬も奥地の木陰に柵を造って繋ぎ、餌を運んだ。馬も立派な働き手であっただけでなく、軍馬としても鍛錬しており、人一倍可愛がっていたので置き去りにすることはできなかった。

蒸し風呂の暑さの避難所内

その年は異常気象を思わせるような猛暑が続いていたから、隧道内は蒸し風呂のように暑くなった。運び込んだ手荷物は汗に濡れて異臭を放ち、蚊や夏虫が群がり、とても身体を休めるような場所ではなく、溜め池隧道と家の間を何度も往復した。

二、三日たって、艦砲射撃はなさそうだと、それぞれの家に戻ったが、それから間もなくの八月九・十日、原町は再び、艦載機による激しい空襲に見舞われることになる。

（次号の後編につづく）

○この「戦争体験」は、志賀五三三さんが執筆の『国見の里から』（平成6年発行・志賀家の歴史とご自身の記録集）の中から、事務局で戦時中の部分を会報2回分に、前編・後編としてまとめたものです。